

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	池野 絢子
論文題目	アルテ・ポーヴェラ ——戦後イタリアにおける芸術・生・政治		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、1960年代末に北イタリアの町トリノを中心に起こった芸術運動「アルテ・ポーヴェラArte Povera」とはいったいいかなる現象であったのかを、作品、一次資料、批評言説等の読解を通じて明らかにしようとするものである。日本語で「貧しい芸術」と訳されるこの芸術運動は、批評家ジェルマーノ・チェラントの命名になるもので、彼によって1967年から1971年にかけて組織された一連の芸術家たちの緩やかな結びつきを指す。最年長のマリオ・メルツから最年少のジュゼッペ・ペノーネまで、十数名の造形作家がこのグループに参加したとみなされている。</p> <p>本論文は、序論と結論をはさんで合計五つの章からなる。各章のタイトルは順に、Ⅰ. 「否定の力——芸術、テクノロジー、メディア」、Ⅱ. 「トリノの地政学」、Ⅲ. 「実践のパラダイム」、Ⅳ. 「前衛と古典主義」、Ⅴ. 「更新されるアルテ・ポーヴェラ——1980年以降の受容」、である。これらに加えて、附録として、当時発表されたイタリア語による主要な批評テキスト四篇——ジェルマーノ・チェラント「豊かな芸術と貧しい芸術」、トンマーゾ・トリーニ「身体と素材のための新しいアルファベット」、ハラルト・ゼーマン「展覧会に寄せて」、マリオ・ペルニオーラ「芸術と革命」——の本邦初の全文和訳が添付されており、本論の理解を助けている。</p> <p>第Ⅰ章では、「アルテ・ポーヴェラ」がその誕生当時、いかなる価値を有する芸術として提起されたのかが、チェラントを中心とした批評言説の詳細な分析を通じて論じられ、ここから当時のイタリアの社会状況——テクノロジーの発達や消費主義の蔓延——がこの運動の背景にあったことが指摘される。従来この運動は、アメリカのオブ・アートやポップ・アートに象徴される「アルテ・リッカ (豊かな芸術)」に対するアンチ・テーゼとして解釈されてきた。だが、そればかりではなく、社会に氾濫するイメージへの強い忌避感があったこと、その意味ではギー・ドゥボールによって組織された「シチュアシオニスト」の運動ともある種の共通性を有すること、さらにはポーランドの演出家イェジュイ・グロトフスキーの「貧しい演劇」という理念からの影響があったことなどが明らかにされる。第Ⅱ章では、この特異な芸術運動が産声を上げた場である北イタリアの古都トリノに目が向けられ、自動車産業の隆盛とともに新たな産業都市として発展しつつあったこの町の、都市空間の変容や環境の変化に対するオルタナティブな意識と、新たな共同性への志向が、この芸術運動の背景にあったことが指摘される。</p> <p>続く第Ⅲ章では、「アルテ・ポーヴェラ」における重点のシフト、すなわち作品そのものから、身体的な行為やコンセプト、あるいは制作プロセスへの移行が考察される。この移行は、「ポイエーシス (生産=制作)」から「プラクシス (実践)」へという芸術の変化として解釈される。さらにそこには、「芸術と／による革命」という政治的なメッセージとともに、芸術と生とを合体させるという意図が込められていたことが明らかにされる。その背景にはもちろん、学生や労働者を中心とした60年代末の一連の政治的な異議申し立ての運動があったこと、加えて芸術の世界においてもまた、芸術制作と作品を取り巻く既存の諸制度や資本にたいする抗議の声が各国で上がっていたことが指摘され、それら同時代の動きと「アルテ・ポーヴェラ」との共通点や差異も考察されている。</p>			

さらに続く第IV章では、1970年代にグループとしての「アルテ・ポーヴェラ」が終息を迎えた後、この運動に参加したアーティストたちのなかにはいかなる変化が生じるかについて論じられる。そこから明らかになるのは、いわゆる「アヴァンギャルドの終焉」の後に浮上してくる、共同体の記憶や歴史への関心という制作理念である。このことはしかし、反動とみなされるよりもむしろ、「アルテ・ポーヴェラ」の運動が当初から持っていた「反近代主義的性格」の一側面として読み替えることができる、と筆者は解釈する。最後に第V章では、1980年代以降この芸術運動がいかに歴史化され、再解釈されていくかに関して論じられる。「アルテ・ポーヴェラ」は、80年代から今日に至るまで、さまざまな回顧展や展示によって歴史的芸術運動として認知されていくことになるが、そこにおいてアーティストたちの作品は、彼らが活動していた60年代末とはやや異なる観点から、すなわちさまざまな要素や素材を結びつけるハイブリッドな芸術として再評価されていくことになる。本章は、その経緯を、主に作品展示の変容の観点から辿っていく。

以上のように本論文は、「アルテ・ポーヴェラ」という芸術運動の全体像を、その内部からのみならず、それを取り巻く批評の言説、展示の空間、場としての都市空間、政治的・社会的な状況、他の同時代の芸術運動などとの関連のなかに置き直して読み解き、さらにはその後今日に至るまでのさまざまな解釈などと突き合わせることで、広い視野から浮かび上がらせようとするものである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の優れている点は、次の三点に要約できる。まず第一に、トリノに起こった戦後イタリアを代表する芸術運動で、世界的にも高く評価されている「アルテ・ポーヴェラ (貧しい芸術)」の全容を、わが国でおそらく初めて明らかにしようとした点。第二に、この特異な芸術運動を、その内部からのみならず、数々の批評の言説、展示の場、都市空間の変容、政治的・社会的状況、同時代の他の芸術運動との関連、その後今日に至るまでの解釈の歴史等、幅広い視野から読み解こうとする点。第三に、「アルテ・ポーヴェラ」誕生前夜から運動の一応の終結までの期間 (1962~1971年) に、主にイタリアで開催された展覧会の関連年表と出展作品の詳細なリスト、さらに当時の重要な批評の言説——ジェルマーノ・チェラント「豊かな芸術と貧しい芸術」、トンマーゾ・トリーニ「身体と素材のための新しいアルファベット」、ハラルト・ゼーマン「展覧会に寄せて」、マリオ・ペルニオーラ「芸術と革命」——の全文訳を、附録として添付した点であり、これらの附録は、イタリアのみならず近現代芸術の今後の研究にとっても、貢献するところが大きい。以上の三点に関連して、以下に具体的に、本論文の独自の論点と新しい成果を挙げておこう。

まず、1960年代の末にイタリアで起こったこの運動は、木材や石や鉄や布などの生の素材をできるだけ手を加えないで用いるという点に特徴があり、多くはトリノとその周辺出身の十数名の芸術家たちのごく緩やかなつながりによって成立していたが、この運動を世界的な芸術のムーヴメントとしてプロモートしていくのに大きな貢献をした存在として、批評家ジェルマーノ・チェラントの果たした役割りが、実証的かつ詳細に論じられている。ここから鮮やかに浮かび上がってくるのは、同時代のアメリカのポップ・アートやオプ・アートに象徴される、マスメディアと巨大資本と大量消費社会に支えられたアメリカ的な「アルテ・リッカ (豊かな芸術)」に対するアンチテーゼの革命的なムーヴメントとして、「アルテ・ポーヴェラ」という名前を創案し、その運動を組織化し、さらに今日に至るまで回顧展等を通じてプロモートしてきたジェルマーノ・チェラントの戦略的で批評的な役割りである。さらに本論では、ほぼ同時代に問題意識を共有した運動として、ギー・ドゥボールによって組織されたアンチ・スペクタクルの芸術・政治的運動「シチュアシオニスト・インターナショナル」と、「アルテ・ポーヴェラ」との類似性が指摘され分析されているが、これも新しい論点である。

次に、本論文の主要な貢献の一つとして特筆されるのは、トリノの芸術家たちによって創出されたオルタナティヴな展示空間「デポジット・ダルテ・プレゼンテ (現代芸術の倉庫)」を、一次資料の現地調査を通じて具体的に跡付けた点である。美術館等の既存の制度とは異なる独自のこの展示スペースについては、これまでもその存在は知られてはいたが、詳細については研究されてこなかった。そこではまた、詩人で映画や演劇も手掛けていたピエル・パオロ・パズリーニが劇作品『狂宴 (オルジア)』を上演していたという記録も残されている。若いトリノの芸術家たちの自主的なイニシアティヴによって開設され、組織され、運営された、この新しい発表の場は、隆盛する自動車産業と消費社会の都市空間にたいするオルタナティヴの空間でもあったこと、さらに、芸術と生の合体という共同体的な志向に根差していたことが、本論文によって初めて明らかにされている。この「デポジット・ダルテ・プレゼンテ」の発掘は、世界的にみても新しい貴重なものであり、今後のさらなる資料の掘り下げと研究の発展が期待される。

三番目に評価すべき点として、「アルテ・ポーヴェラ」のその後の受容史を丹念に辿った点が挙げられる。ここから明らかになるのは、60年代末に同語反復——たとえば「石は石である」——と純粹還元の詩学から出発したこの芸術のムーヴメントが、70 - 80年代において共同体の歴史と芸術的記憶のテーマへと組み込まれ、さらに続いてポストモダン的なハイブリッドとして変奏され、読み替えられていく過程である。にもかかわらず、「アルテ・ポーヴェラ」が一種の近代化へのアンチテーゼ——反経済効率主義、反物質主義、反消費主義、反ブルジョワ主義等——としての同一性を担保してきた点を、論者は強調している。このことは、2011 - 12年にイタリアの各都市で開催された大回顧展での主たるスローガン——これもチェラントによるもの——が、「清貧の芸術」や「聖フランチェスコの芸術」であったことにも象徴的に示されていると、論者は考えている。

以上のような重要な貢献に加えて、個々の芸術家とその作品の具体的な分析や解釈についてもまた新たな論点が提示されている。たとえば、「スペクタクルの両義性」から解釈されたミケランジェロ・ピストレットの「鏡絵画」、「逸名＝無名」性から読み込まれたアリギエロ・ボエッティの《世界地図》、「シミュラークル」という観点から解釈されたジュリオ・パオリーニの石膏像を用いた一連の作品群をめぐる新たな議論である。以上のように本論文は、本邦初の本格的な「アルテ・ポーヴェラ」研究として、優れた成果をもたらすものと判断される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年4月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降